

症例報告

小児に発生した歯ブラシによる外傷性頬脂肪体逸脱の1例

小出裕実子, 真野隆充, 梅田浩嗣, 松村真由美, 坪井長裕, 上山吉哉

山口大学大学院医学系研究科歯科口腔外科学分野(歯科口腔外科学) 宇部市南小串1丁目1-1 (〒755-8505)

Key words : 頬脂肪体, 外傷, 歯ブラシ

和文抄録

外傷性頬脂肪体逸脱はまれな病態である。われわれは歯ブラシが刺さったことによる外傷性頬脂肪体逸脱の症例を報告する。

3歳の男児が歯ブラシをくわえたまま転倒し受傷した。出血を認めるため母親が連れて当科を受診した。出血は止まっていたが、口腔内に頬脂肪体が突き出していた。同日、全身麻酔下で頬脂肪体の切除、創の縫合を行った。臨床経過は問題なく、術後の膿瘍形成もみられなかった。このような外傷を防ぐためには、歯磨き中の危険性を両親に啓発しなければならない。

緒言

外傷による口腔内損傷は珍しくないが、外傷性頬脂肪体逸脱は比較的少ない。今回われわれは歯ブラシの頬粘膜への刺入が原因で頬脂肪体の一部が口腔内に逸脱した症例を経験したので、その概要を報告し、現在の小児における歯ブラシによる口腔内損傷防止の取り組みや問題点について検討したので報告する。

症例

患者 : 3歳男児。

初診日 : 2013年。

主訴 : 口腔内の出血。

家族歴 : 特記事項なし。

既往歴 : 特記事項なし。

現病歴 : 2013年朝8時頃歯ブラシをくわえたまま転倒し、その後右側頬粘膜より少量の出血を認めたため、同日昼過ぎに当科を受診した。

口腔外所見 : 右側頬部に軽度のびまん性の腫脹を認めた。原因となった歯ブラシを確認したが、通常タイプの歯ブラシで、植毛の脱離や破損は認められなかった(図1)。

口腔内所見 : 右側頬粘膜部に有茎性で黄色の腫瘤を認めた(図2)。受診時には腫瘤からの出血は認められなかった。

臨床診断 : 右側外傷性頬脂肪体逸脱。

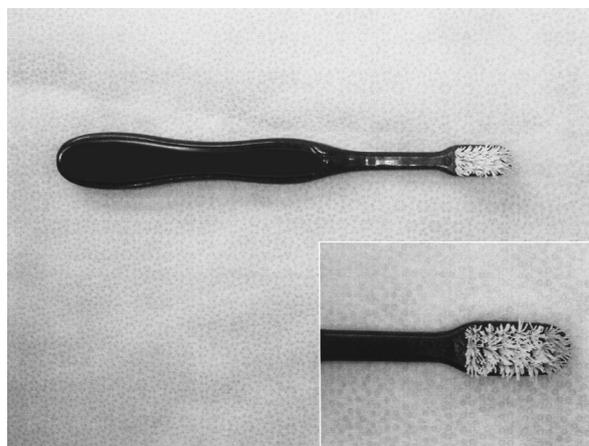


図1 受傷の原因となった歯ブラシ(右下はヘッド部分の拡大像)

植毛部およびヘッド部分に破損はなかった。

平成25年10月21日受理

処置および経過

上記診断にて緊急入院のうえ、全身麻酔下で手術を施行した。処置は逸脱した頬脂肪体を基部より切除した。裂傷内部に異物がないことを確認したのち、



図2 術前の口腔内写真
頬脂肪体の逸脱を認めた (矢印)。

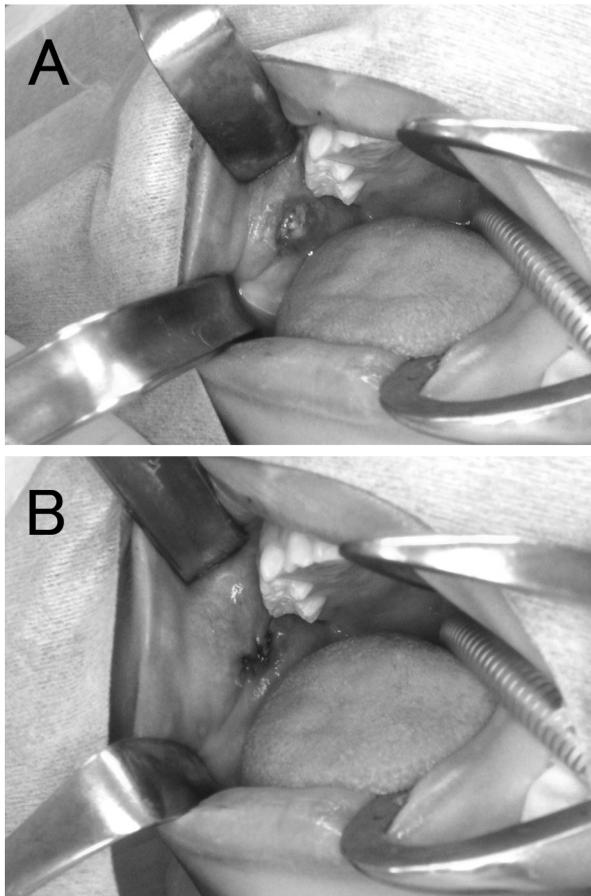


図3 術中の口腔内写真
A: 逸脱した頬脂肪体を切除した。
B: 裂傷部を縫合閉鎖し終了した。

創内部を十分に生理食塩水で洗浄した。創部は耳下腺乳頭部とは離れていたが、これに注意しながら粘膜を吸収性縫合糸で縫合閉鎖した (図3 A, B)。術中、術後には抗菌薬の点滴静注を行った。翌日、軽度の頬部の腫脹を認めるのみで、内服の抗菌薬を処方し退院とした。術後5日目、軽度の頬部腫脹がみられたが、疼痛はなかった。以後腫脹も消失し、頬脂肪体を切除したことによる顔貌の変形もみられず、また、創部感染も認めなかったため、術後3週で経過観察を終了した。

考 察

小児は活動性が高く転倒のリスクが高い。歯ブラシや箸をくわえたまま転倒して口腔内に外傷を引き起こすことは以前より多く報告されている¹⁻⁷⁾。東京消防庁の統計によれば、5歳以下の乳幼児が歯磨き中の外傷で搬送された件数は2007年から2011年の5年間で229件であり、そのうち1歳代が108人と最も多かった。

山崎ら²⁾は外傷性頬脂肪体逸脱30症例の文献的考察を行っている。それによれば、平均年齢は2歳7ヵ月で1歳代が最も多く、乳幼児、小児以外の報告はなかった。小児のみの発生する理由としては、小児では頬脂肪体が豊富であること、頬脂肪体を被覆する頬筋等の発達が未熟であることが考えられている。外傷の原因としては歯ブラシによるものが圧倒的に多く、全体の90%を占めていた。歯ブラシの形態的特徴から粘膜下組織にくい込み抵抗を受けやすく、創部から抜去する際に偶然頬脂肪体が植毛部に絡まり、同時に引き出されてしまうことが考えられた。なかには受傷時には頬脂肪体の逸脱がなく、後日、筋の圧力によって押し出された例も報告されている⁴⁾。処置法としては、新鮮例であれば裂傷部より頬筋内への復位が可能である場合があるが、受傷から経過しているものや感染を伴っている場合には外科的に切除するのが適当であり、切除が80%を占めていた。大多数が耳下腺乳頭部付近に発生しており、切除の際には耳下腺管および耳下腺乳頭部を損傷しないように注意する必要がある²⁾。歯ブラシの植毛部には平均48万コロニーの細菌が付着していると報告されており⁸⁾、歯ブラシによる外傷後の感染の可能性が高く、側頭部膿瘍、咽頭膿瘍、頬部膿瘍

などを起こした例も報告されている^{1, 3, 7)}。自験例においては新鮮例であったが、口腔常在菌の感染の可能性を考慮し、切除を行った。また、受傷当日に処置を行うことができ、創部を十分に洗浄することで感染を起こさず治癒した。

歯ブラシによる事故に対する調査では、受傷したときに使用していた歯ブラシの種類は通常タイプが44%と最も多い。対応策として安全具付きタイプ・持ち手リングタイプ等の歯ブラシも販売されているが、これらが普及してきているとはいえ、またこれらの歯ブラシでも事故は起こっている。消費者庁独立行政法人国民生活センターによるアンケート調査（平成25年3月公表）⁹⁾では、子供（0～3歳）が歯ブラシにより怪我をした、または怪我をしそうになった経験があるのは25%であった。また、約6割の乳幼児が、歯ブラシを口にくわえたままあるいは手に持ったまま歩き回っていた。口腔内に歯ブラシが突き刺さるといふ事故を聞いたことのある保護者は全体の約30%で、多くの保護者がこのような事故が発生していることを知らなかった。乳幼児が齲歯に罹患するのを防止するためには歯磨きは大切な生活習慣の1つである。乳幼児が一人で歯磨きをする際には、保護者がそばに付き添い注意を払うことが必要である。また、乳幼児は保護者の模倣をするため子供の前で歯ブラシを加えたまま歩かないように保護者の行動にも注意が必要である。事故を減少させるためにはブラッシングは一步間違えば危険な行為であることを保護者へ認識させることが重要である。

引用文献

- 1) 足澤美都, 遠藤幹也, 一戸卓人, 他. 歯ブラシによる口腔内外傷後に膿瘍を形成した2幼児例. *小児科臨床* 2001; 54: 923-926.
- 2) 山崎陽子, 三澤常美, 河西八郎. 外傷性頬脂肪体ヘルニアの1例. *山梨中病年報* 2008; 35: 55-57.
- 3) 岩田雅記, 西嶋克己, 高木 慎, 他. 歯ブラシ頬粘膜刺入により波及した側頭窩膿瘍の1例. *小児口腔外* 1993; 3: 41-44.
- 4) 伊藤 耕, 西岡 均, 青木 望, 他. 歯ブラシ刺入部から頬脂肪体が逸脱した口腔粘膜外傷の

1例. *日大口腔科学* 2010; 36: 137-141.

- 5) 小山新一郎, 中野文子, 原田生功磨, 他. 口腔咽頭歯ブラシ外傷の臨床的検討. *口咽科* 2010; 2: 133-137.
- 6) Gadhia K, Rehman K, Williams RW, et al. Traumatic pseudolipoma: herniation of buccal fat pad, a report of two cases. *Int J Oral Maxillofac Surg* 1993; 51: 269-273.
- 7) 山本 潤, 黒田 徹. 歯ブラシによる口腔・咽頭外傷5例の検討. *小児耳鼻咽喉科* 2011; 32: 394-400.
- 8) 香西克仁, 山木戸隆子, 鈴木淳司, 他. 小児における歯科口腔清掃器具の洗浄と保管に関する細菌学的調査. *小児歯誌* 1994; 9: 751-755.
- 9) 乳幼児の歯ブラシによる事故に注意!. 消費者庁・国民生活センター. http://www.caa.go.jp/safety/pdf/130328kouhyou_1.pdf (H25年10月1日)

A Case of Traumatic Herniation of Buccal Fat Pad Caused by Sticking Toothbrush in a Child

Yumiko KOIDE, Takamitsu MANO,
Hirosugu UMEDA, Mayumi MATSUMURA,
Nagahiro TSUBOI and Yoshiya UEYAMA

Department of Oral and Maxillofacial Surgery
(Oral and Maxillofacial Surgery), Yamaguchi
University Graduate School of Medicine, 1-1-1
Minami Kogushi, Ube, Yamaguchi 755-8505, Japan

SUMMARY

Traumatic herniation of buccal fat pad is rare condition. We herein report a case of traumatic herniation of buccal fat pad caused by sticking toothbrush.

Three-year-old boy was injured by falling down with a toothbrush in his mouth. He was admitted hemorrhage, and his mother took him to our department. The hemorrhage had been stopping, but the buccal fat pad extruded into the oral

cavity. On the same day, we excised the buccal fat pad and stitched up the wound under the general anesthesia. His clinical course was uneventful and postoperative abscess formation

was not observed. To prevent such injuries, we must inform the parents of the danger during brushing the teeth.